

---

# 恋するチワワ

町

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋するチワワ

### 【Nコード】

N7762I

### 【作者名】

町

### 【あらすじ】

携帯電話を持っていない「ちわわ先輩」と付き合うことになった若菜は、不満がいつぱいで爆発寸前だった。

「そんな男とは別れちまえ 以上」

昼休みの食堂は混んでいるので、次の講義が行なわれる教室で昼食をとるのがいつもの決まりだった。大講義室の窓側、一番奥の席で惣菜パンを噛み千切っていた橋名若菜はその返答に危うく喉を詰まらせそうになる。慌てて紙パックの麦芽コーヒーを吸い込むのだが、胃の一步手前で渋滞を起している感触。息苦しさに涙を浮かべつつ、ぱんぱんと胸元を叩く。半ば抗議の表明でもあったのだが、友人である市野繭子は気にした風もない。そのまま黙々と弁当を平らげる。

「まーゆー、それはちよつとひどくない？」

ようやく落ち着いていた若菜が横目で睨めば、繭子は大仰に「はあ？」と眉間にしわを寄せた。顔のパーツが大きめの美人だから、凄まじると迫力がある。思わず縮こまれば、不機嫌そうにため息をつかれた。

「ひどいのはどっち。あなたの彼氏と、その愚痴を毎回聞かせてくるあんたでしょ」

「う」

まったくその通りなので、反論できない。

ばつの悪さを誤魔化すようにいたずらにストローを噛むも、剣呑なままの空気に耐えかねて素直に謝罪する。繭子は「ん」と軽く答えて、再び弁当に視線を落とす。艶やかな黒髪のロングに、バニラアイスのような真っ白の肌。品のある正統派美人の繭子だが、性格はさっぱりとしている。だから若菜は悩み事があると、つい彼女に相談してしまう。上辺だけの返事は絶対にしないと分かっているからだ。たまに、あまりの潔い言い切りにダメージを受けてしまうこともあるのだが。

「でも、ちわわ先輩のこと知ってるの、繭子だけなんだもん」

止む得ない理由あったのことだと弁解すれば、繭子は怪訝そうに眉宇をひそめた。

「他にもいるでしょ。実習のティーチングアシスタントしてたんだから」

そして一旦箸を置いてから、繭子は指折り同じゼミの友人たちを挙げる。

「そうじゃなくて、ちわわ先輩のひとりとなり、ってやつを。他の子にちわわ先輩のことを話したら、絶対『変!』って言われそう」

「……わたしも思ってるけど」

「え？ そうなの？」

初耳に驚けば、繭子が美貌を惜しげなく歪めて笑う。その屈託ない様子に安堵して、若菜は再び惣菜パンに噛み付いた。

若菜の恋人は、千和和樹という。ふりがなは「ちわかずき」だが、最初の漢字三文字が「ちわわ」と読めるため、あだ名は「ちわわ」だ。本人曰く、小学校からのあだ名だという。しかしながらその愛らしいあだ名とは異なり、本人はちっとも可愛げがない。あまりに可愛くないので、最近の若菜はチワワ犬を見てもときめかなくなつた。

和樹と出会ったのは去年の四月。若菜たちが受講する授業のティーチングアシスタントが、当時大学院の修士課程に在学していた彼だったのである。

くせのあるぼさぼさ頭に、いかにものインテリ眼鏡。背が高いこと以外は外見にかんして特筆するほどのことはないのだが、若菜は授業初日であっさり彼に恋に落ちた。年上の異性に憧れるという、思春期。たとえ二十歳を過ぎていても、学生である間はいつまでも思春期だ。特有の病気だったのかもしれない。教授のそばに座り、講義の間中ひまそうに長い指でペンを回していたのがよかつたのかもしれない。あるいは、自己紹介のとき、神経質そうな顔をしながら「あだ名はちわわです」と言ったのがぐっときたのかもしれない。とにかく、若菜は和樹が大好きになつてしまつた。

院生ではあるものの教師ではないから、恋心を自覚した若菜は考え得るあらゆる手段を使って彼に好意を示した。分からないことを訊きに院生室に押しかけたり、構内で見かけたら必ず話しかけたりとにかく週に一度の授業以外でも彼の視界に入るように努力し続けたのである。その甲斐あって、今年の二月の最後の授業の日、若菜は和樹から交際を申し込まれた。およそ一年に渡る片想いは実ったのである。

しかし、以後のふたりが順風満帆というわけではない。

修士課程を終えたのち、別の大学院に進学することが決まっていたのである。

念願の彼氏から恋人になって聞いた第一声が「あ、四月から別の大学に通うから」なのだから、若菜は喜んでよいところか悲しんでいいところか分からなくて途方にくれた。確かに、同じ学年ではないのだから、卒業がいつしよではないことは分かっていた。それでも、どうやら修士課程というのはいわゆる五年間ある博士課程の半分で、修了したあとは後期博士課程というのに進むらしいとリサーチしていたから、恋人のいるキャンパスライフというものを妄想しては悦に入っていたというのに。

しかし、悲観にくれることはない。

なんとといっても恋人同士になったのだから、なにも学校で会う必要はないのだ。それこそ今の世の中便利な携帯電話というものがある。会えない日は電話したりメールしたりで愛を育み、休日の約束だって簡単に取り付けられる。

彼女になった気の大ききで、これまで臆して訊けなかった彼の携帯電話の番号とアドレスをたずねれば、そこでまたしても予想外の応えが返ってきた。つまり、携帯電話を所持していない、というのだ。他の男だったら「もしかしてわたしって二号枠？」などと疑ってしまふところだが、相手がちわわ先輩だと妙に納得できてしまふ。実際、若菜は彼が携帯電話を手に行っている姿を見たことがなかった。煩わしいからもたないことにしているし、持つ予定もない、と和樹

は淡々と言った。携帯電話の所持はなにも法律で定められていることではないし、維持費もかかるもの。

はつきりと所持の意味も予定もないと断言されれば、若菜はなにも言えなくなる。ただ唇を尖らせて、「じゃあデートとかどうやって約束するんですか」と半ば拗ねたように問うしかない。だが、この子どもじみた抵抗は意外にも効果があったようで、和樹は「そうだなあ」と理知的な顔立ちで考え込む。長身ですらつとした身体つき和樹があさつての方向に目を向けながら何ごとか考えている姿は様になる。「ああ、このひとが今日からわたしの恋人なんだ……」などと舞い上がってしまったから、和樹の提案をよく吟味もせずにもるつと若菜は受け入れてしまった。

つまり、文通をしよう である。

近況を伝え合うときもデートの約束をするのも、書簡か葉書きのみ。携帯電話はもちろん、公衆電話や自宅電話も使用不可。あまりにアナログで馴染みのないやりとり思わず不平を漏らしかけるも、和樹が少しはにかむように「投函の間が惜しく感じられたら直接ポストに届けにいくかもしれない」などと言うものだから、若菜は顔を真っ赤にして口を噤むしかなかった。ちわわ先輩は卑怯なのだ。さて、それから三ヶ月が経つ。

最初の一ヶ月は一日おきに届く葉書が嬉しくて、なかなかこういう付き合いも悪くはないと感動していた。しかし二ヶ月が過ぎるころには、もどかしくてたまらなくなる。春休みが明け、学校が始まったこともその気持ちを加速させる要因となった。構内で仲睦まじく歩いている恋人たちを羨むのはもちろんのこと、講義中にこっそりメールを打っている学生たちにまで嫉妬を覚えだしてしまう。

リアルタイムで反応がない。

それがこんなにも寂しいものだったのか、と驚愕さえしてしまう。新生活が忙しいのか、和樹から届く葉書の文面は前にもまして無愛想になった。一日おきが、近ごろでは一週間に一度になっている。葉書の住所を頼りに直接彼の下宿まで投函しにいったことはあるが、

留守中だったので会うことはできなかった。和樹からの葉書はいつもちゃんと消印が押されている。彼は若菜のように、不意に会いたくなることなどないのだろう。

楽しみにしていたデートもまだ未達成だ。

誘っても、忙しいという虚しい返事のみ。

おかげで若菜の心のアルバムにある彼の最新の写真は、コート姿のまま。吐く息で白く曇ってしまった眼鏡を掛けた顔のまま。どんな目で自分を見てくれていたのかさえもう分からない。

「男はちわわ先輩だけじゃないよ」

「ぱちんと箸箱のふたを閉じて、繭子が言う。」

一年前なら否定できたのに、それほどの情熱が湧くことはなかった。

授業が終わると、若菜は寄り道をせず直ぐ帰る。

以前までは、アルバイトのない日は繭子と学校のそばにあるファストフードでいつまでもしゃべって時間を潰したり、目当てもないのに服を見に行ったり、あるいは本屋で立ち読みをして帰ったりしていたのだが、和樹と付き合いだしてからはそれらの一切を止めた。早く帰って郵便受けを覗きたいからである。

家のそばまで来ると自然、小走りになってしまふ。なんだかんだ言いながらも逸る気持ちを抑えられず、マンションのエントランスに走りこむ。そうして、「橋名」のプレートがついた銀色の郵便受けをゆっくり開けて、中を覗きこむのだ。

「……ないし」

むう、と唇を尖らせながら、オートロックを解除して中に入る。むしゃくしゃするのであえて階段で五階まであがった。軽い疲労はイライラを和らげると、以前、ファッション雑誌で見かけてから実践しているのである。

「ただいまー」

鍵をあけて家に入れば、奥から母が顔を見せた。

夕飯の支度をしていたらしく、エプロンをつけている。その表情が含みのある笑顔だったから、重い鞆をおろす若菜の鼓動が速まる。

「若菜、葉書届いていたわよ。ちわわ先輩」

「ちよつと、勝手に見ないでよ！ あと、ちわわ先輩って呼ばないで！」

照れ隠しに怒声を上げつつ、急いで母が手招きするリビングに向かう。悪びれた様子もなく母が差し出すのは、相変わらず飾り気のない葉書。ちよつと前までは「官製はがき」と呼ばれていたものだ。やや乱暴に受け取って、恐る恐る覗き込む。

「よかつたわね、若菜」

若菜が意味を理解する前に、母がからかうように腕で突いてくる。

「み、見たの？」

「だって葉書だから見えちゃうんだもの」

「見てない振りするのが大人のマナー！」

「将来息子になるかもしれないんだから、いいじゃない」

そうしたら若菜も「ちわわ」ね、と呑気に母が言う。

母は 否、若菜の両親は和樹を気に入っていた。いまだき珍しい健全な付き合いをしていることに好感を持っているのと、彼と付き合ってから若菜が寄り道せずに帰宅するようになったことに由来する。とりあえず急いで返事をしなければと自室に向かおうとすれば、背中に朗らかな母の声が掛かった。

「お小遣いあげようか？ 最近買い食いせずには帰ってきてるから瘦せたでしょ。奮発してワンピースでも買っちゃいなさいよ」

「よ、余計なお世話！」

半ば叫ぶように断って、若菜は自室の扉を閉める。

落胆したり歓喜したり怒ったりを短時間に行なったため、どつと疲れてしまった。ベッドまで行くのも億劫で、その場に座り込んでしまう。そうして、改めてゆっくりと葉書を覗き込む。

映画を一緒にしませんか。



簡潔な誘い文句とともに、ふたつの映画候補が挙げられていた。

片方はとある文豪の代表作を映画化した今話題の邦画で、若菜も観たいと思っていたもの。もうひとつはよく知らないタイトルだった。携帯電話を取り出して、タイトルを検索する。どうやらフランス映画らしい。フランス映画は難解なイメージがあるし、元々興味もあつたので、邦画のほうで返事を書こうと決める。

勢いをつけて立ち上がると、若菜は机に向かう。一番上の引き出しには、文具店で買い込んできた葉書がしまわれている。絵文字を使うことができないので、割高になると知りつつ、若菜は可愛らしい背景がプリントされている葉書を送るようにしていた。もちろん、切手もたっぷりストックしてある。

「ええと、映画館は三条の……」

同じ引き出しからメモ帳を取り出し、まずは下書きを書く。それから、携帯電話で上映時間なども調べて、候補をメモしておく。メールのように何度もやりとりができないので、最小限で済むようにいろいろ考えなければならぬ。何度も見直して十分だと思えたら、ペンで葉書に清書していく。

そして、できあがったものをまた丹念に見直す。納得できたら切手を貼って、近所のポストに投函である。母は毎回「出してきてあげるわよ」と言ってくれるが、もちろん頼んだことはない。

「出してくる！」

パンプスをつっかけて、若菜は返事も待たずに家を飛び出した。

\*

それからの二週間は、繭子が気持ち悪がるほどに若菜は上機嫌で過ごした。

ポストに投函してから四日後に届いた返事には、待ち合わせの日時が記されていたのである。三ヶ月ぶりに会う恋人は変わっているだろうか。繭子には冷たく、「成長期過ぎた成人男性に変化なんて

あるわけないでしょ」と言い捨てられたが、若菜としては、心のアルバムに最新写真が曇った眼鏡の和樹でなくなるならなんでもよかった。

そして迎えた初デートの当日の日曜日。

最終的に母からの援助をうけて購入したワンピースを纏い、若菜は何度も姿見の前でくるくる回る。三日前に美容院に行つてカラーとカットとトリートメントをしてもらったから、髪も問題ない。いい匂いのするワックスも毛先にちよつと塗っている。鞆の中もきちんと整頓して、ティッシュもちゃんとティッシュケースにしまった。「ちわわくんによるしくな」

リビングで新聞を読んでいた父にまで激励される始末。

「い、行つてきます！」

けれど意外にもいやな気持ちではないまま、若菜は待ち合わせ場所へと向かった。

しかし。

結論をいうと、待ち合わせ場所に和樹が現れることはなかった。

最初、指定された時間を三十分過ぎても若菜は平気だった。待ち合わせである地下鉄の改札付近の壁にもたれ、MP3プレイヤーで音楽を聴いていた。一時間が過ぎたときにはさすがに不安になって携帯電話を取り出したが、掛ける先などないからそのまま鞆にしまつて立ち尽くす。お気に入りのアルバムが三周目の再生に入ったときには、目尻に涙が浮かんだ。立っているのが辛くなってしゃがみたくなつたが、ワンピースなのでそれもできない。改札から出て行くひとたちに気を配りながら、近くの売店でガムを買って噛んだ。これもイライラ対策にいいらしい。

しかし、さすがに一ダース全部を噛み終わってしまうと、どうしようもない虚しさと憤りが溢れてくる。プレイヤーはもはや数え切れないほど同じ曲をリピートしていた。携帯電話を何度も開いて見

るのだが、着信はなかった。ただ、繭子からの冷やかしメールが一通来ているのみ。返信する気力もない。

その日最後の映画の上映時間が過ぎてても、和樹が現れることはなかった。改札口の心配そうな駅員の視線を意識しながら、若菜は家に帰るために切符を買った。

ただ立っていただけなのに、ひどくくたびれてしまった。

早く帰ってベッドに倒れこみたいと思いつながら、一心に家を目指す。しかしどれほど疲れていても習慣とは思えないもので、ついついエントランスで立ち止まって郵便受けを覗きこんでしまう。ダイレクトメールなどといっしょに、見慣れた素っ気無い葉書。ゆっくりとひるがえせば、風邪を長引かせているからデートには行けなくなったとのこと。消印は昨日で、速達の印もついている。

けれど、遅すぎた。

「……っ」

葉書を握り締めたまま、若菜は嗚咽を漏らす。

帰り道、必死で堪えていたものが堰を切ったように溢れ出す。

好きだから、会いたい。

会いたいのには会えないのが辛い　とても辛くて、寂しい。

(辛いはっかりならいっそ)

こんな気持ち、消えてしまえばいいのに。

\*

思い立てば、簡単だった。

散々なデートの翌日、レトルトのお粥とも缶を携えて若菜は和樹の下宿先を訪れた。見舞い品を入れた紙バッグの中には、携帯各社のパンフレットを入れている。繭子には呆れられたが、大事にしまつてある彼らからの葉書を眺めていたら、やはり決意は揺らいでしまつたのだ。

別れ話は、する。

でも、彼が妥協をしてくれたら 携帯電話を契約してくれた、撤回する。それ以外は、もう無理だ。それだけは確かである。

いかにも学生が住んでいそうな、安っぽいアパートの一室の前。このご時勢にオートロックですらないなんて、と妙なところに感心しつつ、若菜は彼の部屋のチャイムを鳴らす。一回では反応がないが、二回目で奥から音がした。三回目を押そうとしたところで、扉が開く。驚いたように目を丸くした和樹が顔をみせる。久しぶりに会った彼は、病み上がりのためか、少しやつれて見えた。

「若菜ちゃん？」

「お、お見舞いです」

さすがにアパートの廊下で別れ話を切り出すわけには行かないから、バッグを掲げて訪問の理由を濁す。それから、中に入れてください、と告げる。渋るかと思っただが、意外にもあっさりと和樹は承諾した。

「どうぞ。散らかつてるけど」

そう言っって背を向けた瞬間、ごほつと軽く咳き込む。

まだ体調が悪いのかもしれない。そういえば今日は五月といえども夏めいていて汗ばむぐらいなのに、ジャージの上着をはおっている。

「昨日はごめんね」

ワンルームの室内は、思ったよりも広かった。

ノートパソコンが置かれた小さめのデスクと、大きな本棚が三架びつしりと本やファイルが収まっており、彼の勉学に対する熱意が伺えた。ベッドはなく、敷きっぱなしの布団がある。それ以外にものらしいものは無く、とても殺風景だった。テレビも無い。散らかっていると言ったのは、布団のそばに置きっぱなしのスポーツ飲料のボトルと紙コップ 食器を洗うのが億劫だったのだろうの事を指すのだろうか。

「いいんです。ちわわ先輩、お身体大丈夫ですか？」

「うん。もう大分元気。ありがとう あ、座布団ないんだ。床だ

と冷えるから、布団の上に座って」

「い、いえ。大丈夫です。あの、お見舞いに来ただけですから」

布団の上に過剰に反応してしまうのは、独り暮らしの恋人の部屋に来ているという事実を意識してしまったため。慌てて紙バッグを差し出せば、怪訝そうな顔をしながらも礼を述べ、和樹が中を覗きこむ。

「お粥とも缶？　ありがとう。あとでいただくよ……と、これは？」

不思議そうに取り出して見せたのは、数社の携帯電話会社のパンフレット。布団に驚いて、順序をついつい飛ばしてしまった。出鼻を自ら挫いてしまったことで、考えていた話の内容も飛んでしまう。しどろもどろになりながら、若菜は言葉を探す。そんな若菜に、和樹は眼鏡の奥の目を細めて座るように促した。押し問答をするのも無駄と悟り、若菜は素直に布団の上に腰を降ろす。和樹は布団の上には座らず、若菜と向かい合うように床に直接座った。

「ちわわ先輩、携帯持ちませんか？」

悩みに悩んだ末、ストレートに問う。

「こんな風に体調を崩されていたのにわたし気づかなかつたし、本当なら、もつとしんどかったときにお見舞いしたかったです」

あぐらをかいた和樹が、うん、と相槌を打つ。

それがただただ優しく、自分が好きになった一年前の彼と変わらなくて、気づけば若菜は感情のままに涙をこぼれさす。そう。彼はなにも変わっていないのだ。恋人となった今もそうではなかった昔も、若菜に対する態度が変わっていない。それはつまり、若菜に対する気持ちが変わっていないことを示すのではないだろうか。きつと今でも彼の中では若菜は単なる「ティーチングアシスタントを受け持った授業の学生」に過ぎないのだ。

「ごめ、ん、なさい。あの、急に泣いて、すみませ、ん」  
うまく言葉が紡げない。

涙を止めなければと乱暴に指で拭おうとすれば、伸びた手に制さ

れた。

「ぼくはここににいるから、なんでも言つて。手紙じゃ書けないことがあったから会いに来てくれたんだろ？」

「せ、先輩は、ちわわなのに可愛くない、です……！」

まるですべてを見透かしているような理知的な眼差し。

涙とともに溢れ出す感情が、若菜を雄弁にした。

「もっと先輩とお話したいです。言葉のやりとりしたいです。お返事が届くのが毎日待ち遠しくて苦しいです。声がいつぱい聞きたいです。もっと構って欲しいです！」

これまで葉書には書けなかったことを一気に口にする。

文字にしようとするれば恥ずかしいから、あるいは淡白な彼の態度に対する強がりで隠していたことをなにもかも彼にぶつける。言えば言うほど、どれだけ彼のことが好きなのかを自覚してしまう。片想いするときよりももっとも彼のことを考えるようになったこの三ヶ月。知らない間に膨れ上がったいた気持ち。そのすべてを、和樹はただ静かに聞いている。わがままを怒るでも笑うでも呆れるでもなく、ただ優しく若菜の腕を掴んだまま聞いてくれている。

「携帯電話を持つことって、確かに簡単なんだ」

一通り吐き出して落ち着いた若菜の頭を撫でながら、和樹がパンフレットを見遣る。

「でも、簡単だから、言葉が軽くなっちゃうと思わない？」

意味が分からなくて首を傾げれば、和樹が立ち上がった。そして、ノートパソコンの置かれているデスクからなにかを取り上げて若菜に渡す。題名も記名もない、何の変哲も無いノートである。視線に促されてめくれば、たくさんのメモ書き。シャープペンシルで書き殴ったようなものもあれば、ボールペンで丁寧に書かれたものもある。ひとつひとつを黙読して、若菜はあることに気づく。それらのいくつかは、彼が送ってきてくれた葉書にも書かれていたものだ。

「手紙つてさ、メールより書くのに時間が掛かるよね。それを投函して、相手の元に届くのに数日、返事が返ってくるのにもまた数日、

その間、相手のことばっかり考えてる。ちゃんと届いたかな。意味が伝わったかな。返事をくれるかな……メールなら、多分数十分で済んじゃうけど、手紙ならそれが何日にも渡る」

優しい和樹の言葉は、ゆっくり胸に染み入る。

若菜にも実感のある話だ。

「博士課程は別の大学進むことは決まってる、もう会えなくなるのは分かった。その間にきみがぼくのことを好きじゃなくなるかもって考えたら、賭けに出るしかなくて」

そう言っただけで浮かべるのは、例の少しはにかむような笑顔。

これではもう、怒るのめばかばかしい。

若菜は見事その策略にはまってしまったのだから けれど悔しいから言っただけやらない。付き合う前よりもずっと好きになっただけで済んでいることなど。

「大体、電話なんて糸電話で十分だよ」

長い腕を伸ばして、和樹がペットボトルの横に出してあった紙コップを取り上げる。いくつか重ねられているうちの一個を手に取り、若菜の耳に押し当てる。糸など出ていないから、もちろん何も聞かない。そもそも糸がついていたとしても、糸電話では話ができる距離が知れている。

意味がないと不満をあらわにすれば、和樹が優雅な仕草で小首を傾げた。

「じゃあ、いつも繋がるようにぼくのとなりにいたらいいんじゃない？」

さも当然のように言うものだから、若菜は絶句してしまう。

「……やっぱり、ちわわ先輩は可愛くないです。卑怯です」

負けっぱなしが悔しくて最後の抵抗とばかりに唇を尖らせれば、和樹が笑った。

「知ってる？ 『ちわわ』って、意外と独占欲強いらしいよ」

尖らせていたままの唇に彼のものが触れる。

だから若菜は、その「ちわわ」がどれを指すのか問うことができ

な  
か  
っ  
た。



(後書き)

ちわわがゲシュタルト崩壊しそうになりました。  
読んでくださって、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7762i/>

---

恋するチワワ

2010年10月8日15時09分発行